

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12595

研究課題名（和文）遊牧民の現代的布置に関わる人類学的研究-トルコのユルックの生活設計とグローバル化

研究課題名（英文）An Anthropological Study on Contemporary Condition of Nomads: Life Planning and Globalization of Turkish Yours

研究代表者

田村 うらら (Tamura, Ulara)

金沢大学・地域創造学系・准教授

研究者番号：10580350

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：トルコの遊牧民とされて来たユルックを、厳密な意味での遊動人口としてのみ捉えるのではなく、遊動-半遊動-移牧-半移牧-一定住の連続のなかで捉え直すことにより、彼らが都市や村落の一角に根を下ろしてもなおユルックとして生きようとする現代的状況を明らかにすることができた。特に、都市在住のユルックたちを中心に国内各地で結成される遊牧民文化協会の連带的活動展開が、トルコ全体のオスマン帝国懐古の風潮とも共鳴しながら、ユルックの存在が「誇るべきトルコの伝統」として広く一般市民にも波及している状況については、調査分析が予想以上に進み、各種学会・論文・書籍の形で成果を公表するに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

トルコ全体が1980年代以降大きな変動を経験したにもかかわらず、人類学者の松原正毅による1980年代のユルック研究以来、ユルックの変化や現代化を扱った研究が蓄積されず、同国のグローバル化の90年代以降現在までほぼ完全なブラックボックスと化して来た。本研究は、そのような長い空白を埋めるものとなった。とりわけ、基本的には定住しながらユルック文化復興に注力する人々の生活史や活動を精査し、社会的政治的背景とも関連づけながら明らかにしたことは、民族文化の現代的動態に関わる議論に寄与するとともに、都市定住社会の相対化への端緒ともなっただろう。

研究成果の概要（英文）：By reconsidering the Yoruks not only as nomadic people in the strict sense, but also as part of a continuum of nomadic-semi-nomadic-transhumance-semi-transhumance-sedentary, contemporary situation of Yoruks were depicted clearly.

In particular, the "publicization" of the existence of Yoruks in the general public in Turkey was one of the major findings. The negative image of "Yorukness" which had been long stigmatized as vulgar or outdated was mostly faded nowadays. Instead, the sense of "Yoruks as our honorable tradition" is spreading out to the general public, somewhat resonating with the recent national trend of nostalgia for the Ottoman Empire.

Those findings have been presented or published in various academic conferences, papers, and books.

研究分野：文化人類学

キーワード：遊牧民 ユルック 人類学 トルコ共和国 文化復興

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

人類学者の松原正毅の研究以降、トルコのユルックについては、1980年代以降経済自由化でトルコ全体が大きな変動を経験したにも拘らず、変化や現代化を扱った研究が蓄積されず、90年代以降現在までほぼ完全なブラックボックスと化している。他方で非歴史的で本質主義的な民俗学的研究は同国内において多産されたが、現代の遊牧民理解にはほぼ役に立たない。経済自由化の'80年代・グローバル化の進んだ'90年代後半という研究蓄積の空白期がある中で、また新たなターニングポイントに差し掛かっている今、遊動生活を記憶する世代が多く残るうちに彼らを研究すること、つまり現在の実態を仔細に観察し、各世代に過去30-40年の変化を綿密に聞き取り記録することは、人間が培ってきた遊牧という生業と現代社会の特質を共に照射するための急務であった。

2. 研究の目的

本研究は、モノ研究と経済人類学の視点から、トルコの「遊牧民」の現代的布置について明らかにすることを目的とする。ユルック(トルコ遊牧民)を自認する人々の過去数十年の変化の過程に着目し、遊牧民を広く遊動-半遊動-移牧-半移牧-定住の連続のなかで捉えなおすことを通じて、本質主義的な遊牧民研究に優勢な「消失の語り」を克服し、現代に生きる遊牧民とその生活実態を詳らかにする。現代トルコ社会経済の激しい変化に柔軟に対処しながらその「遊牧民性」を生きる彼らの生活世界を、モノ研究と経済人類学の視点から分析することを通して、遊牧という古典的生業について新たな知見をもたらすと同時に、都市定住が前提とされる現代社会を相対化する地平を拓くことを目指す。

3. 研究の方法

まず研究対象を、a 季節的遊動の有無と滞在箇所数、b 固定的家屋の有無、c. ヤギ・ヒッジ群保有の有無 d. 遊動時の家畜に付き添う世帯員数などの指標と各々の変化年代を元に類型化したうえで、それぞれの生業や生活変化の過程について、主としてフィールドワークによる参与観察とインタビューによって調査した。調査対象のユルックは、主に南部アンタルヤ・ウスパルタ・コンヤ・カラマン・メルスィン県に居住あるいは遊動する人びとである。

彼らに対する具体的な調査内容としては、

1. 所有するモノとその変化にまつわる調査(世代間・時代・場所と居住空間)。
2. 生業と人生をめぐるさまざまな局面での選択についての調査。
3. 生活・生業上のネットワークと変化の分析(経済関係・地縁関係・親族関係等)である。

加えて、ユルック関連団体などの関係者らにもインタビューし、彼らの主催するイベント等にも参加し、観察を実施した。また適宜関連資料を収集・精査しながら、現地調査で得られたデータを分析した。

4. 研究成果

トルコの遊牧民とされて来たユルックを、厳密な意味での遊動民としてのみ捉えるのではなく、遊動 半遊動 移牧 半移牧 定住の連続のなかで捉え直すことにより、彼らが都市や村落の一角に根を下ろしてもなおユルックとして生きようとする現代的状況を明らかにすることができた。

特に、都市在住のユルックを自称する人々を中心に国内各地で結成される遊牧民文化協会の連帯的活動展開については、調査分析が予想以上に進んだと言える。そうした団体は、2000年代後半以降、その数を飛躍的に増大させた。また広く一般市民向けに、「シェンリック」あるいは「ショレン」と呼ばれる祭典を主宰して来ている。このようなイベントにおいては、食・踊り・音楽や展示などを通じて、ユルック文化が「我々トルコ人が誇るべき伝統文化」として肯定的にトルコ市民一般に浸透してゆくさまが観察された。元来は、ユルックといえば「粗野で時代遅れ」というイメージが定着しており、数十年前まではそうしたスティグマ化によりかなり差別的な扱いをユルックたちが受けて来たことを鑑みれば、大きな変化である。さらに、こうしたユルックの「国民伝統文化化」あるいは「公共化」がトルコ全体のオスマン帝国懐古の風潮とも共鳴しながら進展していることも、興味深い。

他方で、一般市民の包含を意図せず文化協会関係者や国内研究者が集うユルックの会議等では、より明確な形で戦略的な「ユルック-トルクメン文化」復興の重要性と、諸外国のテュルク系人口居住地域、テュルク系諸国との強い連帯の必要性が強調されていた。

これらの新たな発見については、人類学・地域研究・テュルク研究関連の各種学会での発表、あるいは論文・書籍の形で成果を公表するに至った。

ただし、実施期間中、新型コロナウイルスの世界的流行により現地への渡航が3年間も制限されてしまったことにより、地道な現地での実証的データ収集が必要な事項については、当初想定していたほどの成果をあげることができなかった。特に上記方法の第1項に関わる、現代も一定

の遊動を続けるコルックたちの生活実態をモノ研究的・経済人類学的手法により解き明かすことについては、まだ積み残した部分が多い。とはいえ、延長期間には新たに相当数の移牧・遊動コルックたちを訪ねて調査をし、一定程度のデータと人的ネットワークを得ることはできた。このやや不完全に留まった点については、後続研究課題にも発展的に継承してさらに研究を継続したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 田村うらら	4. 巻 18
2. 論文標題 年次大会公開パネル 発表要旨 「マイノリティから汎テュルク主義のアクターへ トルコにおけるユルックの現在」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本中央アジア学会報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今村薫、田村うらら	4. 巻 2
2. 論文標題 トルコのラクダ相撲 ラクダ利用と異種交配の視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 「遊牧と定住化」中央アジア牧畜社会研究叢書	6. 最初と最後の頁 103-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田村うらら	4. 巻 20
2. 論文標題 公共化するユルック - トルコにおける「遊牧民」の連帯をめぐる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域研究	6. 最初と最後の頁 56-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田村うらら	4. 巻 24
2. 論文標題 「トルコ南部の遊牧民ユルックの現在: 生業を巡る変化を中心に」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『生態人類学ニュースレター』	6. 最初と最後の頁 82-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田村うらら	4. 巻 164
2. 論文標題 「嫁入り道具からみるトルコの近代化と人びとの価値観」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『季刊民族学』	6. 最初と最後の頁 79-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 田村うらら
2. 発表標題 パッチワーク絨毯にみるオーセンティシティのありか—トルコ発のグローバルな流行現象をめぐって
3. 学会等名 日本文化人類学会第56回研究大会（分科会「手仕事のオーセンティシティー「プリント化」する伝統染織品が投げかける問い」セッション内の発表）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田村うらら
2. 発表標題 マイノリティから汎テュルク主義のアクターへ—トルコにおけるユルックの現在
3. 学会等名 日本中央アジア学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田村うらら
2. 発表標題 トルコ共和国における「遊牧民」ユルックの公共化：文化祭典の分析から
3. 学会等名 日本中東学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ulara TAMURA
2. 発表標題 "From Backwardness to Pride: Yoruk Cultural Revitalization through Performances in the Largest Nomadic Festival in Turkey" , in the Panel titled "Distributed Multimodalities: Ethnographic Experiments in Memory and Performance"
3. 学会等名 A Biennial Conference of the SCA and SVA, "Distribute 2020" in Toronto, Canada (online conference) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ulara TAMURA
2. 発表標題 Trading days. An examination of labor exchange in Turkish carpet weaving villages
3. 学会等名 International Workshop on "Debt: 5000 Years and Counting" , at Birmingham Research Institute for History and Cultures (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 今村薫編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 223
3. 書名 ラクダ：苛烈な自然で人と生きる (分担執筆・共著)	

1. 著者名 シンジルト	4. 発行年 2022年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 162
3. 書名 目でみる牧畜世界－21世紀の地球で共生を探る	

1. 著者名 Gaku Kajimaru, Caitlin Coker, Kazuhiro Kazama eds.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Trans Pacific Press	5. 総ページ数 194
3. 書名 An Anthropology of Ba: Place and Performance Co-emerging	

1. 著者名 シンジルト、地田 徹朗 編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 名古屋国語大学出版会	5. 総ページ数 215
3. 書名 牧畜を人文学する	

1. 著者名 AYAMI NAKATANI ed.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Lexington Books, NY	5. 総ページ数 305
3. 書名 : Asian Handmade Textiles in Motion	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>金沢大学 研究者情報 田村うらら https://ridb.kanazawa-u.ac.jp/public/detail.php?id=4335</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------